

2009年1月8日

人間科学研究科長 殿

五十嵐 友里 氏 博士学位申請論文審査報告書

五十嵐友里氏の学位申請論文を下記の審査委員会は、人間科学研究科の委嘱を受け審査をしてきましたが、2008年12月15日に審査を終了しましたので、ここにその結果をご報告します。

記

1. 申請者氏名

五十嵐 友里

2. 論文題名

社会不安の情報処理過程における post-event processing の役割

3. 本文

(1)本論文の概要

本論文の目的は、社会不安障害に対する認知行動療法の効果を向上させるための基礎研究の一環として、社会不安の情報処理過程における post-event processing(以下、PEP)の役割を検討することであった。

本論文の第1章では、これまでの社会不安障害における PEP に関する研究動向について展望を行った。第2章では、第1章の展望を踏まえて、①わが国において PEP を適切に測定することができる質問紙尺度が整備されていない、②PEP と既存の認知的処理である心配、反すうとの異同や、それら相互の関連性について明らかにされていない、③PEP がどのようなメカニズムで社会不安の維持に影響を与えているのかの解明が不十分である、④PEP に実際に介入を実施して、社会不安症状を低減させた研究がほとんど見受けられない、という4点を問題点として指摘した。そして、これらの問題点を明らかにすることの心理臨床的意義を述べた。

第3章では、問題点②を解決するために、Cognitive Intrusion Questionnaire 改定版を用いて、PEP と反すう、心配との思考様式の異同について、理論的、実証的に検討を行った。その結果、PEP、反す

う、心配の順で過去指向的要素を含んでいること、PEP は反すう、心配と比較してイメージで経験されやすく、さらに、そのイメージは観察者視点で思い浮かぶ傾向が高いことが示された(研究1、研究2)。

続いて第4章では、問題点①を解決するために、PEP を適切に測定するための Post-event Processing Questionnaire 日本語版(PEPQ)の質問紙を作成し、PEPQ が高い信頼性と妥当性を有することを示した(研究3)。そして、問題点③を解決するために、社会的場面を経験している時の社会不安に特徴的な情報処理バイアスと PEP との関連性に焦点を当てて、PEP が活性化することが、社会的場面に対する解釈に対して影響を与えるかどうかについて検討した(研究4)。その結果、場面に対する解釈は PEP の活性化を受けてネガティブに歪められる可能性があること、その歪曲の過程には観察者視点の自己注目が関連している可能性があることを明らかにした。また、ネガティブな解釈は、社会的状況を経験している時の状態不安を高め、さらに、後続する類似の社会的場面に対する予期不安を高める影響性を有する可能性があることを示した(研究5)。さらに、同様の観点から社会不安障害患者に対してインタビュー調査を行った結果、PEP の活性化が状態不安を高め、予期不安を高めることにつながることを明らかにした(研究6)。以上のことから、PEP は社会不安の介入対象となりうる要因として位置づけられることを示唆した。

第5章では、問題点②と問題点③を解決するために、PEP、反すう、心配という3つの認知的処理が、どのようなメカニズムで社会不安症状の維持に影響を与えるのかについて共分散構造分析を用いて検討した。特に問題点③の解決に関しては、第4章の研究4、研究5が社会的場面経験時に焦点を当てたのに対して、第5章では、社会的場面経験の事後の認知的処理に焦点を当てて検討を行った(研究7)。その結果、PEP は、反すうや心配の活性化の始まりに影響すること、すなわちそれらの認知的処理活性化のリスクとして機能し、社会不安症状に悪影響を与えることを明らかにした。特に、モデルの統計的評価の結果から「PEP→反すう→心配→社会不安症状」という処理の流れの影響性が強いことを示した。

第6章では、問題点④を解決するために、第3章から第5章までの知見を総合し、PEP の介入を用いた効果検討を行った。すなわち、第3章で、PEP は観察者視点の自己イメージで経験されやすいこと、第4章で、PEP はネガティブな解釈や不安の維持に機能している可能性があること、第5章で、PEP は反すうと心配の活性化のリスクとして社会不安症状に影響を与える可能性があること、が示されたことを踏まえ、現実的な自己イメージの呈示を用いることによって PEP の活性化を低減させるための介入を行い、介入の社会不安低減に関する効果検討を行った(研究8)。具体的には、PEP に対する介入としてビデオフィードバックと認知的対処トレーニングを両方行う群、認知的対処トレーニングのみ

を行う群、統制群を設け、実験内で行うスピーチ課題に対する PEP と社会不安に対する介入効果を検討した。その結果、ビデオフィードバックと認知的対処トレーニングを両方行った群においてのみ、PEP と社会不安の低減が認められ、ビデオフィードバックによって現実的な自己イメージを知覚することが PEP の活性化の低減に有効であり、結果的に社会不安の低減にもつながることを明らかにした。

最終章である第7章では、本論文の研究結果に対する総括的な考察を論じた。その主な論点として、PEP を適切にアセスメントして介入対象として扱うことが、介入コストを増やすことなく社会不安低減の効果の増大をもたらすこと、などを取り上げた。そして、本論文で得られた知見から示唆される臨床心理学的意義、および今後の課題としての問題点を述べた。

(2)本論文の評価

本論文は、申請者がこれまでに行ってきた、社会不安障害に対する認知行動療法の効果を向上させるための基礎研究として、社会不安の情報処理過程における PEP の役割に関する一連の研究をまとめたものである。本論文において高く評価できる点は以下の通りである。

その第1は、社会不安症状の軽減に対する認知行動療法の効果を高めるために、これまであまり扱われてこなかった PEP の概念を取り上げたことである。本論文の研究対象者は必ずしも社会不安障害の患者だけではないが、社会不安障害に対する認知行動療法の改善率を概観すると、従来から取り上げられてきた認知的処理である「反すう」や「心配」に着目しているだけでは不十分であるとした点は非常に独創的である。ただし、PEP を含めたこれらの認知的処理は類似している点も多く、具体的な記述が困難であるという問題点がある。そこで、本論文の研究3では、PEP の測定尺度を整備し、研究1、研究2、研究7では、理論的、実証的にこれらの概念の異同や相互関連性についての検討を行い、これらの認知的処理を区別した記述や処理の流れを明らかにした。この知見は、決して PEP への介入効果の優位性のみを示したわけではなく、既存の理論や認知的処理との整合的理解が可能であるとした点において、今後の社会不安障害に対する認知行動療法の精緻化をはかる上で画期的であると考えられる。

第2は、社会不安症状の中核的な認知的処理であるとされてきた「注意バイアス」や「解釈バイアス」への介入に加えて、認知行動療法における PEP への介入の可能性を示したことである。これまでも認知行動療法に基づく社会不安障害の治療においては、社会的場面経験中の情報処理プロセスとの対応関係を理論的背景に持つ具体的技法が提案されているが、特に社会的場面を離れた後の変数である PEP への介入の有用性を示すことは、認知行動療法に基づく介入の幅を大きく広げる可能性を示すことになる。認知行動療法の手続きにおいては、面接中の直接的な介入ばかりではなく、患者にホームワークなどを課して、日常生活の中でのトレーニングなどを重要視することも多い。した

がって、社会不安を対象とした PEP に対する介入は、面接場面を離れた場面でも効果的に機能することが期待できる。そこで、研究4、研究5、研究7、研究8では、PEP と認知的バイアスや社会不安との関連性を確認し、ビデオフィードバックを行うことによって実際に PEP に介入を行うことが、社会不安の軽減効果をもたらすことを示した。PEP に対する介入は、必ずしもビデオフィードバック技法に限られるわけではないが、これまでの研究知見では、それまでに経験した社会的場面の再生を求めると、社会不安障害患者は他者視点からのイメージを再生しやすいことが見いだされていることから、現実的な自己イメージを確認することができるビデオフィードバックが認知的介入として有効に機能したと考えられる。全体として、今後 PEP に対する介入のバリエーションが確立されれば、対象者の社会不安の状態像に応じた介入方法を構築できる可能性を示した点において、本論文の臨床心理学的意義は非常に大きいと考えられる。

以上に示したように、申請者の行った研究は、国内外の臨床心理学研究領域、特に社会不安の認知行動療法の領域において先駆的であると言える。社会不安障害患者への適用例が不十分であることなどの課題もいくつか残されてはいるが、これまでに行われてこなかった視点から実証的知見を論文全体として示したことは、この領域の基礎研究として高い評価に値すると考えられる。したがって、申請者の論文は、博士(人間科学)の授与に値すると判断する。

4. 五十嵐 友里 氏 博士学位申請論文審査委員会

主任審査員 早稲田大学教授 博士(人間科学)(早稲田大学) 嶋田 洋徳 印

審査員 早稲田大学教授 博士(人間科学)(早稲田大学) 根建 金男

審査員 早稲田大学准教授 博士(人間科学)(早稲田大学) 鈴木 伸一

審査員 埼玉医科大学教授 医学博士(東京女子医科大学) 堀川 直史